

令和3年2月6日～3月15日、天理大学附属天理参考館を会場にして、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、天理市教育委員会との共同展「天理 山の辺の古墳」展が開催され、天理市内の古墳から出土した副葬品や埴輪などの資料、計134



写真1 共同展の展示室風景

件461点が展示された。主催機関のひとつ、橿原考古学研究所附属博物館は、平成30年(2018年)12月23日から、老朽化した空調機器等の改修工事のため、約2年間の予定で長期休館中であり、平成31年(2019年)10月から、所蔵の優品を各地で巡回展示しているところであった。今回の共同展は、休館中の橿原考古学研究所附属博物館の所蔵資料の活用をはかると同時に、天理市教育委員会が発掘した資料や参考館の所蔵資料を合わせて展示することで、普段は離ればなれになっている天理市内の古墳出土資料が一堂に会する初めての機会となった。

展示室では、天理市内の地域別に、「南部の古墳」(大和・柳本古墳群)、「中部の古墳」(杣之内古墳群、石上・豊田古墳群、別所古墳群)、「北部の古墳」(東大寺山古墳群)、「低地部の古墳」(荒蒔古墳)という形で、順路に沿って資料が配列された。「南部の古墳」については、橿原考古学研究所が、戦後間もなく、双方中円墳として知られる櫛山古墳(国史跡)の発掘調査を行ったほか、1990年代に、中山大塚古墳(国史跡)、下池山古墳(国史跡)、黒塚古墳(国史跡)において埋葬施設の発掘調査を立て続けに行った経緯がある。とくに、平成9年(1997年)から翌年にかけて、発掘調査が行われた黒塚古墳は、三角縁神獣鏡33面と画文帯神獣鏡1面が出土した「世紀の発見」が有名で、天理市が整備した史跡公園内の展示館で、竪穴式石室の実物大復元と鏡のレプリカなどを見ることができる。しかし、出土資料の実物(国保有・重要文化財)は普段は非公開となっていて、今回、三角縁神獣鏡5面の実物が特別に展示された。また、櫛山古墳の腕輪形石製品や柵形埴輪、中山大塚古墳の鉄やり・円筒埴輪片・特殊器台片、下池山古墳の装身具類(石釧・勾玉など)などは、今回が初めての里帰りとなった。「南部の古墳」については、このほか、天理市教育委員会が西殿塚古墳、東殿塚古墳で発掘した埴輪類も目を引いた。とくに東殿塚古墳の船を描いた円筒埴輪は有名な資料ながら、ふだんは展示されることがなく、私が実物を最後に目にしたのは、平成27年(2015年)、天理市制60周年を記念した冬の文化財展「古墳の町天理」が天理市文化センターで開催された時だった。

一方、「中部の古墳」は、天理市教育委員会の所蔵資料を中心に展示が構成され、近年、発掘調査が行われた豊田狐塚古墳、豊田トンド山古墳の横穴式石室出土の各種副葬品のほか、平成30年(2018年)に新しく国の史跡に指定された西乗鞍古墳の埴輪、小墓古墳の木製品などが展示された。「中部の古墳」のなかでも、天理大学杣之内キャンパスに近接する杣之内古墳群については、

天理大学歴史文化学科が協力を行い、天理市と天理大学が共同で発掘調査を進めている東乗鞍古墳の埴輪片・土器片などを展示したことが特筆される。歴史文化学科では、企画展示室前のロビーで、西山古墳と塚穴山古墳の測量データを利用して作成した立体模型(約1/500)を展示するとともに、大学関係者による西山古墳、東乗鞍古墳の調査研究を紹介するパネルの掲示を行った。また、ロビーのスクリーンには、発掘調査中の東乗鞍古墳をドローンで撮影した映像を大画面で映し出し、墳丘の構造と周囲の景観を臨場観たつぷりに見ていただいた。

「北部の古墳」では、和爾町上殿古墳の鉄製武器・武具類が橿原考古学研究所附属博物館から初めての里帰り



写真2 ロビーを利用したパネル展示

をしたほか、天理市教育委員会から、赤土山古墳の家形埴輪や石製品などが展示され、円筒埴輪の出土状況を復元した模型がロビーで公開された。また、天理参考館が所蔵する東大寺山古墳の円筒埴輪が展示されたが、埋葬施設から出土した数々の副葬品(東京国立博物館所蔵・国宝)は里帰りをしなかった。せめて、有名な中平銘鉄刀だけでもレプリカを作成し、天理市内のどこかで展示するべきだろう。

さて、今回の共同展では、橿原考古学研究所とその附属博物館から初めて里帰りをした資料の数々に目を奪われ、また、人物や動物・建物などを象った荒蒔古墳の形象埴輪類など、天理市教育委員会の所蔵資料の充実ぶりに改めて驚かされることになった。しかし、残念なのは、天理市に、近隣の桜井市、田原本町、その他市町村のような文化財の常設展示施設がなく、貴重な文化財の数々が、ふだんは人目に触れることなくお蔵入りになってしまっていることだ。天理市文化センターで、夏と冬に開催される文化財展では、期間を限定した展示が行われているものの、物足りないと言わざるを得ない。初めて里帰りをした展示資料が多かったのも、天理市に常設展示施設がないことが原因のひとつになっている。

その点、杣之内町に奈良県が設置の準備を進めている「なら歴史文化芸術村」では、当初、天理市の文化財課の機能全体が移転し、常設の展示室も設けられる計画が示されていた。しかし最終的に、遺物整理室の業務の一部だけが施設内に移転する形となってしまった。今からでも何とかならないものだろうか。もし、それが無理なら、展示室を含む独自の施設を将来的に設置することを構想してみてもどうだろうか。場所は、「なら歴史文化芸術村」の近接地に天理市が整備した観光駐車場の敷地内が最適だろう。あるいは天理大学とタイアップして、それ自体が歴史的建造物である一号棟(旧天理外国語学校本館)のリノベーションを行い、その一部を天理市の文化財展示を行うスペースとして活用するといったことも考えられるかもしれない。今回の共同展を通して、多くの人が、天理市が誇る貴重な文化財が常設展示されていないことを残念に思ったはずである。観光資源ともなる貴重な文化財を、眠らせず、活用するための方策が求められる。